# 第18回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一八回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございました。おかげさまで前年よりはるかに多い三六四名の方から九〇八篇の作品をご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十一月一三日、渡辺みえこ、五十嵐勉各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

授賞式は、残念ながらコロナウィルス流行の影響により今年も見送らせていただきます。賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第一九回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も同じ要領で募集を行ないます。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

## 第18回「文芸思潮」現代詩賞

### 最優秀賞

「漂流の窓」「静謐の繭」
「君の命が杯になる」
由木名緒美（福島県会津若松市）

「染める」「鬼ごっこ」
「シャボン玉」
後藤　順（岐阜県岐阜市）





### 優秀賞

「池袋駅、午後二時」「秋の牢獄」「咳ヲ縊スルハトホキ春ノユメ」
北村灰色（埼玉県和光市）

「合歓木」「かっこう料理店」
笹井のぶこ（北海道帯広市）

「泪の塊」「あの子の海」「失った言葉」
遠藤芳子（東京都狛江市）

「命に終わりなどなかった」「たれる」「雫」
橘いずみ（島根県出雲市）

「しらふのくるい」「たった独りで内輪もめ」「ついに雄叫びは上がる」
藤城　藍（京都府京都市）

「ゆらり」「システム」「ファースト・キス」
松永悠希（愛知県豊橋市）

「クローン」「アンニュイ」「針のような崖の上に立つ翼のない鳶」
薬師丸怜央（千葉県流山市）

「雑闘（ざつとう）」「topology」「分界」
中村郁恵（北海道札幌市）

「死の想い」「別離」
佐藤　裕（神奈川県横須賀市）

### 奨励賞

「銀髪美犬ひと撫で」「詩刑執行」「蝙蝠姫９２５」
岩尾宏紀（大分県速見郡）

「確執」「鮭」「戦」
麻生ゆり（愛知県豊明市）

「隙間を泳ぐ」「僕ら罪の子、不幸の子」「生に到る病」
実川阿仁（神奈川県川崎市）

「シンコペーションサイバーライフ」「ツイート」
「少女、呼吸」
及川るな（東京都世田谷区）

「都市『寄生回生』」「縄張り」「託せるならば、あの雲に」
久利潤保（福岡県久留米市）

「虚空の軍列」「彫像と現在時」梶原大賀（兵庫県神戸市）

「顔」「空」「宙」
十路田道広（福岡県福岡市）

「木蓮」「失楽園」「春の詩」新夏（群馬県伊勢崎市）

「恋」「足止め」「半身」
八柳　椋（京都府舞鶴市）

「青春を飲む」「青春を吐く」日向　鷗（東京都港区）

「季節邂逅」「線路は続いて」遠藤月尾（東京都福生市）

# 選評

## 詩魂の表現

渡辺みえこ

第一八回「文芸思潮」現代詩賞応募作品は、豊かな詩情を持っている作品が多く、その詩魂を詩作品にするためのそれぞれの形式の模索が感じられた。

情報も錯綜し、グローバルな現代文化の中で生きる「私」の詩的表現として、常識や慣習に亀裂を入れるような、詩の言葉も散見された。

最優秀賞の由木名緒美氏は、比喩が的確で言葉とイメージが適合し独特な詩的世界を形成している。「静謐の繭」については、「静けさは声を出すことができない」というのは、詩情を聞き取ることのできる感受性のある耳を持った著者が、「涙の零れ落ちる音を」さえ聞きとる。そのように世界を見つめる目が世界と出逢うことで詩の魂は、さらに醸成されていくだろう。

最優秀賞の後藤順氏――「鬼ごっこ」は、鬼ごっこの鬼の「ぼく」が、「ノゾミ」を見つけられない喪失感を三陸の美しい風景と共に、子どもの遊びとして受け止めようとする痛みが静かに表現されている。「地震」はもう少し具体的な描写と、「ノゾミ」と「ぼく」との関係性が書かれているともっと読者に伝わったのではないだろうか。

優秀賞の中村郁恵氏の「雑閙（ざっとう）」は今生きている現実を冷静に見つめ、優れた現代都市風景詩が構築されている。「靴音」「ひとり立ち止まる」などと書かれているが主語はなく、人々は都市の風景となってゆっくり流されていき、ふとネガフィルムのように反転もする。「topology」は、輪ゴムという身近なものを題材にした秀作だ。あまりに卑近なもので、誰も詩の題材とは思わないものだが、その中に都市の風景を重ねる視覚的な発想は、斬新だ。この非人称の語りも乾いた都市の空気を効果的に映している。疑問を残したままの終わり方もよい。

優秀賞の薬師丸怜央氏は、「針のような崖の上に立つ翼のない鳶」の表現に、苦しい状況が伝わってくる。十六行目の「まるで　私達　みたい　だ」というのは、散文的説明になってしまうのでないほうが良い。そういうことは他の比喩で分かるので。「老女水晶玉の向こうで顔伏せる」で終わって余韻を残すこともできる。

同じく優秀賞の藤城藍氏の「しらふのくるい」は透明鮮烈で、内面を書いていて現実世界とのずれが良く表現されている。異質な言葉のぶつかり合いが異化を産んで詩的衝撃が効果的である。六連目の「吐き気がして頭がどうにかなりそうなのに／ああどうしてこんなに気持ちがいいのか！」というような告白的な説明は他で表現しているので隠したほうがよい。

松永悠希氏の「ゆらり」は、流れがスムーズで詩形が整っている。もう少し長く書いて、三連か四連に分けて、真ん中で盛り上がりを作るとさらに説得力がでる。

笹井のぶこ氏の「合歓木」は、合歓木の「花糸が　淡くあかく」流れ、歩く人の視線の移動と記憶、あかくなった川を洗う人の映像が交錯し、そこで生きてきた人の姿が幻のように揺れる。中心になる形、例えば「石段に焼き付いた影」などをもう少し明確に書くとはっきり伝わるものが残るのではないか。

遠藤芳子氏「泪の塊」は普通の流れる涙ではないように思える。涙でなく「泪」としたのは、著者の思いがあったのだろうか。江戸時代にあった「泪橋」は、鈴ヶ森など処刑場手前で罪人と今生の別れの場として名付けられた。「ガラス細工の目に盛り上がる泪」などをもう少し書き込んで具体的描写で伝えて欲しい。「あの子の海」は爽やかな風が感じられてよい。六連目、「柿の実のように」はないほうがよい。流れ星は消えていくようにはかないが、柿の実は重いので。

佐藤裕氏は、重い風景を見つめているが、少しの光があると闇が輝くように対比的な光のようなものもいれてみてはどうだろうか。

北村灰色氏の「池袋駅、午後二時」はある都市の静止画像でもあり、こんな都市風景の連作もできるのではないだろうか。

奨励賞「青春」（日向鷗）は、著者にとって大事な概念であるのでこの言葉を使わずに青春を表現するとよい。

及川るなの「シンコペーションサイバーライフ」「ツイート」などは、日常描写のなかに自然に詩的幻想がはいっていて寓話的になっている。よい詩情を持った行が沢山ある。例えば「どこまでも落ちることのない紙飛行機。音を立てずに、一匹の金魚が私の夏の空を今でも泳ぎ続けている」など一編の強い詩にすることもできる。

「縄張り」（久利潤保）は畳みかける強さがある。具体的な場が書かれていれば、架空であっても収斂されて一編の詩のまとまりとして掴める。

惜しくも奨励賞にはならなかったが、佳作の中にもいい作品があった。

「小鳥の消えた真昼の樹の下で」（森下万尋）の著者は「石の悲鳴」を聞いているのであろう。よい詩行があるが所々でイメージが切れてしまうので、まとまりのある像を結べるところが中央あたりにあると強くなる。

「母の日」（元澤一樹）は、母との生と死の関係が、身体的に書かれていて母への挽歌となっている。最終連は視覚

的に訴えてきて心に残る。
今回もそれぞれの詩を通して今、生きている人の内面の声に接した思いがした。

**渡辺みえこ**

わたなべ　みえこ

日本女子大学、文教大学など元大学講師。創作技法論（詩）、日本文学講読。詩誌「いのちの籠」同人。日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。
2009 第59回H氏賞詩集賞選考委員。
2015 第47回横浜詩人会賞選考委員長。
詩集
『耳』詩学社 1972。『喉』思潮社 1982。『声のない部屋』思潮社 2001。『水の家系』南風プレス 2002。
『空の水没』思潮社 2013（第十回日本詩歌句大賞受賞）。
文芸評論『女のいない死の楽園―供犠の身体三島由紀夫』パンドラカンパニー刊　現代書館発売 1997（第一回女性文化賞受賞）など多数。

## 佳作

「水の雫」「線香」「命の水」　水沢朱実
「蚕蛾―交雑／motion」「母の日」　元澤一樹
「生まれたての太陽が」「枝さき」　北原　満
「父の戦い」「奈保子さんへの愛とその経緯」　吉井　裕
「特急列車」　田中浩司
「愛する」「再生」「あなたがいた頃」　絹本ゆい子
「光る産声」　天ヶ谷麗
「記憶の途中」「四文字　アフリカ」　松原泰子
「人間という生き物」

「hanabi」「Plung into concrete」「Anotherdream」　渡辺八畳
「土葬」「ポタジェ」「恋人」　妻咲邦香
「Oの侵犯―酸化するクロニクル」「ジャカードの夜」
「三羽の三足の烏」　福永十津
「炎陽」「錦秋」「三冬尽く」　河合麻衣
「燃ゆる海　焼ける空」「幼い頃の私」
「フラワーワールド」　杜山美帆
「春恋」「重点」「冬、凍り来る」　龍郷みさき
「杖」「土に眠る」「まだ、」　中道侶陽
「星」「I don't forget」　インバ





「華を悼む」　剣城かえで
「てのひら」「手のひら」「掌」　向日　葵
「見えるか」「人生曳航」「笑み」　小山田良三
「小鳥の消えた真昼の樹の下で」　森下万尋
「オーバーライト」「渋谷の火星人」
「チーズケーキ」　華賀　透
「わたしたちに明日はない」　鴉變　諒
「羽化」「青春ノ病」「紅い花」　一橋省吾
「ない言葉」「sweet dreams」「愛していたか」
「サハラにてⅠ」「サハラにてⅡ」「石棺の町」　有澤かおり
「蜿蜒」　松本昂幸
「産声―ロココの天命」「涙腺―ロココの展開」　林　やは
「のまれる」「反芻する」　小山修一
「ふくらむ月」「個体の空」「透明なリボン」　miharu
「最後の歌のあとに」「パンセ」「常に在る庭」　有門萌子
「外套膜」「角砂糖と指切り」「哺乳瓶監禁」　赤津龍之介
「Observer」「Invisible」「Mr.Blue Sky」　野葛間
「一歩」「登高」「枯れ木」　鈴木歯車
「今、この位置にあって」「最愛」「しわざ」　清水一美
河野真優

「あなたの骨」「わたしの骨」　愛羽　文
「絶望の向こう側で」「悲しみからの旅立ち」　三浦恵子
「精神臨界」　佐々木愛滓
「正しい嘘」「死期」「青い空をみた」　てづかかなこ
「暗号世界のラブドール」「暗号世界の聖剣士」
「暗号世界の神見習い」　ヨクト
「ディアボロだだもれ」「のっぺ一行日記」
「お迎えは花の香り」　むがもち
「かまいたち」「夜叉」「避難民、と、」　津島一馬
「坂を下る」「蝶の痛み」　五十月彩
「宇宙の最期」「はな」「文明」　鳴海　篁
「焼失する夜」「女」「霧の外」　島畑まこと
「凱歌」「波浪」「星の種」　秋葉政之
「わが子に…傍らに眠らせつつ」「目覚め」
「てつぼう」　辻　洋一
「永遠」「磔刑」「青空咽喉」　横川五歩
「春うらら」「わたしの父」「わたしの中に」
山中　六
「旅路」「さよなら、悲しみ」「女王の帰還」
銀森そのみ

# 持続の研磨の上に

五十嵐 勉

第一八回「文芸思潮」現代詩賞は、上位が安定した力を示していた。すでに最優秀賞・優秀賞の経歴ある詩作者が、濃密な結晶をもたらしていた印象がある。

飛び抜けているものはない代わりに、持続の研磨の上に、繚乱とした華がもたらされた開花感がある。

最優秀賞の由木名緒美氏は、以前の原罪を根にした激烈な上昇展開が、今回はむしろ地に広く染み渡っていく水平方向の展開を見せて、深まりを蔵している。何か大きな体験を乗り越えた余韻が、新たな詩の幅となって降りている。特に「君の命が杯になる」は、肯定的なものを前面に烈しく出し、行の変化によって力強く打ち出していることが、凱歌にも到達し得ている。苦難を乗り越えた光が宿っているように思えた。

後藤順氏は、これまでも一貫して生活に根差した詩を謳い挙げてきたが、今回は特に「染める」が傑出していたことで最優秀賞に輝いた。祖母の人生史を基盤に、藍染めに一生を捧げたひたむきな姿にその本質の深部まで光を届かせた。それが藍という植物の大地からの生育をも汲み取って、自然の根の力から掘り起こしていることが、大きな生きる力を呼び起こしている。一人の生の称賛として、大地をも呼び込み、「この国のすべての女たちへ」と普遍的な共鳴に達している点が、この詩を高めている。詩が一人の女性の魂を高め、広く行き渡ることによって浮かばれる魂鎮めの余韻を響かせているところに、この詩の到達がある。

北村灰色氏は、前回よりも言葉の切れがよくなり、その分、力がこもって言葉に伸びが出た。淀みない言葉はリズムを伴って、紡ぎ出す快感を備えている。また日常風景を捉えながら、その奥にある矛盾や奇怪さを見通す透徹した眼も冴えている。「池袋駅、午後二時」のタイトルも、この眼がなければできない、意表を突く言葉である。特に「秋の牢獄」は高校時代の記憶とオーバーラップして、閉塞する現代の心理と、その打ち破りの企図を投げている。もっと構想とボリュームがあれば、もう一つ上に手が届きそうな位置まで来ている。

叫びという点では、初登場の藤城藍氏に爆裂感があった。「しらふのくるい」は率直な吐露で、感情の裸体感が気持ちいい。やや説明的な部分や、余計な句もあるが、物怖じせずにしっかり振り切り、思い切りぶつける投擲に爽快感がある。このあと壁にぶつかることもあるかもしれないが、今はとにかくこの素直な直球を大事にしてもらいたい。

同じく優秀賞の橘いずみ氏は、平易な言葉を過去からの異相の持ち出しによって、新鮮な現実を立ち上げている。





その心理風景の重なり合いが、精妙な音色を醸し出す。過去に呼びかけ、その木霊と対話するように響きを現在のシーンに投影していく。それが現実を鮮やかに、しかも陰影を色付けて、溶ける美しさを付与している。「たれる」「雫」など、前よりも奥行きが深くなっているのを認めた。

初登場の笹井のぶこ氏は洗練された高い詩想で、豊かなリズムも伴って起伏のうねりも大きく、展開力は雄勁なものがある。この詩は原爆の追悼をこめているとも取れるが、その重なりはまだ明確ではなく、その点の曖昧さが逆に詩を弱めている。さらにその意図を明示し、規模を大きくして天空をめざせば、いっそう飛躍できそうだ。

優秀賞二回目となった薬師丸怜央氏は、「クローン」「アンニュイ」というカタカナ外来語のタイトルの作品はやや落ちる。カタカナを使うと、言葉に込める意思が荒くなり、胸奥に届かなくなる危険を露呈している。「針のような崖の上に立つ翼のない鳶」が最も訴えてきて、薬師丸氏のよさを結ばせている。丸みのある優しさを奥底に湛えた鋭利な言葉群の投擲が自身の美点であることを自覚して、もっとその奥底を広げてほしい。鋭い言葉を投げて叩きつけるその底に広がってくるナイーブな優しさを、意識して深く湛えられるようになると、魅力が倍加するだろう。

遠藤芳子氏の詩は、年々詩としての自立性が高くなり、根はしっかり叫びと怒りを蔵しながら、離陸して翔ける飛翔力を増している。最後の結句部分が弱いが、もっと神への抗議を強めることで、逆に結晶してくる希求があるはずだ。それがいっそう純度を増して、普遍的な母性の祈りとなって、万人の胸に広がっていくことを期待している。

中村郁恵氏は「雑閙」、「topology」など、これまで台所空間など狭い空間からの位相の裁断に当てられていた視点が、外へ出ていく方向が感じられる。それは評価できるが、curation や topology など用語の説明が煩わしく、詩を損ねている。新用語に頼らない言葉で勝負すべきで、持ち味の立体位相を出入りする感覚の拡大は、それらを用いなくても十分可能なはずである。

優秀賞の中で最年少一九歳の松永悠希氏は、自然なみずみずしさで快い詩空間を立ち上げている。ただ、ボリュームが足りないので、私は奨励賞に留めて次回を見てもいいのではないかと思ったが、渡辺選考委員の強い推挙に従った。溌剌とした若さの感性が繊細な溶け合いをなして夢を紡いでいる。これに魂を入れるには、華奢な気がしたが、これはこれでみずみずしさの中で結晶を得ているとし、将来を欲張らず、今を大事にすればいいとも言える。どう育って発展するかは博打だろう。

佐藤裕氏の「死の想い」は、詩の言葉としての飛躍性は乏しく、逆に重く執拗な沈降感がある。この鈍重さの中にむしろ誠実な志向性が感じられ、死を想うことによって明

らかになる生の尊さが浮かび上がる。よく読み込まないとわからない晦渋さも伴うが、鈍さと実直さは、共感を呼ぶ。

奨励賞の中で、岩尾宏紀氏は「詩刑執行」などよく工夫されていて、インパクトも強く、優秀賞のレベルと思えたが、少し言葉の練り合わせが過多で、詩想の高揚に力が削がれているのが惜しまれた。麻生ゆり氏も「鮭」など具体物の中に本質を探る新しい斬り込みは評価できるものの、深く抉る背後までの到達が足りなかった。他に遠藤月尾氏の「季節邂逅」、新夏氏の「木蓮」、実川阿仁氏の「隙間を泳ぐ」などが印象に残っている。

現代社会の上部は凄まじい勢いでシステム化が進んでいる。一人一人の人間が自由に生きていく領域はますます狭められ、圧迫されている。特に若者をはじめ、いったんレールを外れた者にとって、生きにくさは倍加する。しかしそれになんとか持ちこたえて、未来へ踏み出す力を蓄えて欲しい。詩はそれらへのよすがの一つになりうる。思いを叩きつけ、叫びを発して、この世界の矛盾を告発してほしい。それが美しい結晶としての言葉であればあるほど、神の胸を射抜くだろう。

**五十嵐　勉**　いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞
他に中篇小説集「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など





## 入選

「眼」　苑田有子
「きりさめる」「あなたは　だあれ」いまだまりこ
「支柱」「傷の葉」「流風」　柚詠
「夜叉」「水溶性」「初めてのウサギ」坂井　傑
「小舟」　日々野いずる
「チャイナローズ」「人生」「安住の地」霜月愛子
「蝋燭」「恩人」「の前」　麻
「日向ぼっこ」「豪雨」　はしのぶしげ
「海上都市」「割り切れない病い」　夏宝洛
「異国の思い出」　片岡周子
「返事をして惑星」　てるてる
「月めくるいのち言葉」
「緩やかに歩き続け、眠ることを知らない」　鬼尾聖来
「溢れる汽車」

「滅びるね、人間は」「地獄湯」「偶然の一本松」　岩崎　明
「リンチパーティなんかやめろ」
「モンスタークレーマーなんかいらない！」三日月李衣
「もっと光を」「草木の声なき声」
「船乗りたちへ贈る唄」　徳年
「言葉」　深山麻衣
「ひかり」「しおり」　古宮行恵
「花を愛でる」「春を生き抜く」　街角　香
「月夜の人魚の解剖学」「Emerald Tiger」　神崎梨花
「華想夢幻～緋色の残響」
「グレープフルーツの詩」「愛の詩」　神崎琴音
「無限と琴線の詩」　馬渕兼一
「うしろから」「ノルマンディー」
「驟涙」「捧げるハーモニー」「眺める」芳水るびい
「百日紅」「雨後」　田村全子
「重さ」「痛みなきイタミ」　Aquira A.
「私は宇宙に飢えている」　Rata
「かたつむり」「星あそび」「無言」
「夕方から夜にかけて」　日下直哉
「そのとき」「花の香り」「水仙の花」五十嵐ソフィー
「その世界と、と、と、と、世界」　J
「最果てには」「憎しみとか」「死人」伊吉マリ
「パレード」「命の勲章」　いしぜきけいこ
「デスロール」　設楽いくこ
「押し花」　若松橙花
「今はまだ他人事のお話」「過去に潜むミイラ」南月
「あっとうてきにできること」「どこかでみた死」　珠芽めめ
「Soulmate」「あのカフェで」「ゆっくり底へ」　上原翔子
「還る場所」「たしかにそこに」
「それでも生きていく」　館　友利
「流雪」「彼方へ」「一音」　東風佳子
「つよさをください」「いのち」「美徳」皇　朝子
「桃色の挨拶」「祈り」「問」　有明　愛香
「優しさ」「こころ」　雨霧あめ
「揺れ」「自転」　可不可
「閃光」「不在届」「夏の空」　水無川渉
「落差」「ディスタンス」「同時性」　山口たおず
「愛について」「星とダンス」　寝癖
「汚染」「化粧」
「遮断機のほうへ」「闇の中で人間」　渡部榮太
「グレゴリー、底抜ける森が」　白井鶴乃
「変化」「紫陽花」「リゲル」　坂田康雄
「呼吸」「射精」「朝」　水縹　悠
「現象群」「アルミ缶」「飴細工」
「Plankton……,Planet……,Planetarium」
「墓をのみこむ」「みなしごたち」　赤津将太

# 漂流の窓

## 由木名緒美

宙に浮かんだ多面体の器を
銀河の零した蒸留水が満たしている
捧げる願いは光線となり壁面を通過する
その中で胎児のようにうずくまり
あらゆる業と宿命を反芻したかった

見上げる夜空に散らばる光が
セラミックの残骸ならば
幼い頃に地面を探って集めたプラスチック片のように
偽りのダイヤモンドが普遍の価値を覆す
意味付けは時として残酷で
あなたが偽りなく真意を説く程
真実は亀裂を鮮やかに映し出す

Naomi Yugi

四肢から滲む涙
生きている間は桃源郷の門が閉ざされていることくらい
知っておけば良かったのだ
自己愛は完結した瞬間　熱い体を引き離す

名を呼ぶ声に肌をそばだてて
唇を這う無欲の温もり
電気ケトルの蒸気に沈黙が潤う存在の追認に
互いの耳の震えを共有し合う微かな罪悪
結露した夜の窓に姿は映らない
肩にまわされた腕が解く純粋な暗号を
深夜の黙祷に委ねたら
響き合うのは大きさの違う二つの心音
赤く燃える星々を宿して
溢れ出す生誕の餞(はなむけ)に
蝋燭はかすかな余命にその芯を震わせる

### 受賞の言葉

由木名緒美

悲しい時、言葉は海へと投げ入れた銛のように沈殿物を追って下へ下へと潜り込む。恐ろしい魔物の気配に海上へ引き上げてみれば、それは透明な皮膚を陽光に輝かせる神秘的な生物だったりする。言葉を探す行為そのものが感情の昇華を司っているのだろう。悲しみは現された時点でその翳りを濾過してくれる。それでも嬉しい時に書き出す言葉は、太陽に向かって万華鏡を覗くかのように幸福を幾重にも累乗させてくれるものだ。言葉は悲しい時も喜びの時も、鉛筆をコンパスとして光の方角を射し続けてくれる。すべての言葉は祝詞であり、希望そのものなのである。最優秀賞をいただくことは今回で二度目となりました。私の鉛筆は光の方向を射してくれているのだろうかと祈りつつ、前回より明るい作風となれたことにほっとしております。選んで下さった選者の先生方、本当にありがとうございました。

由木名緒美――――――――
ゆぎ　なおみ
1983　会津若松市生まれ
福島県立若松女子高校中退
現在　飲食店勤務
2018第14回「文芸思潮」現代詩賞最優秀賞受賞
第11回、第12回同優秀賞

# 染める

後藤　順

藍染めの死に装束をまとい
乳白色の笑みが零れそうな祖母が
蝋燭の炎がたどる宿命に
真っ赤な夕陽に染まった火葬場
この世の色彩は染料で作られているのか
わずか十歳で紺屋に奉公し
ひらがなの文字すらおぼえぬまま
藍染めの鬼女と世間が呼んだ
八十九歳の生涯のなか
病児を持つ母親の哀しみを捨て
止むに止まれぬ技を伝える
己ひとりに秘めた執念が
白内障の患いを隠し
地べたを這いずり藍の若芽を
我が子のように撫でる姿に
父が嫉妬し続けた日記が残された
藍を建て　藍を染め　藍を守る
朝夕　静かに藍甕に櫂を入れ攪拌する

祖母の情念が耕した藍の畑で
心臓発作で見つめた青い空とは
凍てつく大地と華やぐ大地に
人は死するまで色彩を求めるのだろう
雑草が繁る祖母の染場
誰が壊したのか　割れた染瓶から
藍染めの血が大地へ
白く焼かれた祖母の骨を拾う
私のどこにも藍はいない
人は美しいものを見たとき
とっさに飛翔する幻覚に襲われるとの
少女から女へと変身した
祖母が紡ぎ出した色を
言葉にできなかった言葉の奥底に
この国の幾層もの白い屍が重ねたと
祖母が幾万回とも染めつづけた
藍の一生に
新しい女たちが指先を藍に染める





空気に触れる瞬間
鮮烈な緑から　涼しく深い藍の色へ
おずおずと最初に鍋底へ入れる
張り渡し絹布は純白
無我に入る一歩手前
祖母は狂気をおびた鬼になる
あとは一気呵成に魂を失い
祖母の白髪が透明になっていく
石臼をひく暮らしに
藍は決して応えようとはしない
ただ　紺瑠璃の美しさを称える藍の
艶々とした香りに
祖母は生きる全てを捧げたかもしれない
この国のすべての女たちへ
美しい藍の色合いに飾りたいと
節くれた太い指と
痩せて渇いた爪の奥の奥まで
藍に染まった祖母の
いや　陰部までも藍に犯されていると
シベリア帰りの祖父は
沈黙の時を尊ぶまま

**後藤　順**
ごとう　じゅん
1953　岐阜県生まれ
立命館大学中退　岐阜県在住
詩集「ぬけ殻あつめ」（土曜美術社出版販売刊）「ニンゲン欠乏症」「日本海かぶれ」ほか
詩誌「ひょうたん」同人
月刊詩誌「詩と思想」書評委員
日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員

## 受賞の言葉

後藤　順

詩を創作し、詩を愛読する人は、この国にどれだけいるのかと、ふと思う。俳句や短歌に比べると寂しい思いがする。戦後、「現代詩」と呼称してから、難語を羅列した言葉群が「詩」と勘違いされ、読者から縁遠い存在としての文学に変質した。深読みした隠喩など、作者自身も解析できない詩語が、かつて人の詩情に触れたものでなくなった。

詩の公募は、ある意味、詩を書く者にとって、発表の現場になる。自分の詩がどのように評価されるのか、第三者の目がある。詩作品に優劣などないが、文芸としての高みを目指す頂きは存在する。この国に「詩人」がいるのかと、常に疑問符が浮かぶ。「詩作からだけで飯を喰う」という次元からすれば、夢喰う獏だろう。

次回も、この詩賞に応募することで、自らの生きる糧を得よう。まだ見ぬ詩作品が背中を押して来る気がする。

# 雫

橘いずみ

しずく、と呼ばれてふりかえる
熟柿をつるつる吸って
あごに陽をこぼしている
このごろは
もみの木みたいな髪をかざって
朝ごと祝いたくしてくれる
あれはしずくにちがいないけれど
けれどもいつ
雫になったのか
まだそうではなかった日のしずくと
この胸をつかみにくるてのひら
しずく
お前は雫だが
お前を雫にしたものは





何だったろうね
夜まで開け放したままの脱衣場
隣のはしもとさんはもういないから
それでよかったのに
やっぱり冷えてしまった
五十年そこに暮らしたはしもとさん
自転車ごと消えてしまった
雫は陽に濡れたゆび先を
頬やそでにこするたび
けんめいに照る
はたしてまだ
雫でもないの
お前はいまも
うまれているの
ぐじゅりぐじゅりとたれている
それは
まだ

橘いずみ
たちばな　いずみ
学生時代より自費出版を始め、以来詩集の刊行の他、脚本、歌詞、詩のワークショップなど。2019年/2020年資生堂web花椿コンテンツ「今月の詩」に入選。2019年の作品が読者投票第一位を獲得。翌2020年1月、花椿文庫として小詩集「煮魚を齧る」が28,000部刊行される。2021第17回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞受賞

## 受賞の言葉

橘いずみ

第18回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞を頂戴しましたこと、大変光栄に思います。これで二年続けての優秀賞受賞となりました。今年も最優秀賞に届かなかったことは悔しい想いでおりますが、この一年間、自分なりに深めてきた学びが詩に表れているのだとしたら、素直に誇りたいと思います。

さらに引き出しを増やして、厚みのある作品を書けるよう邁進してまいります。

関係者の皆様、この度はありがとうございました。

第18回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

# 池袋駅、午後二時

## 北村灰色

切り刻まれる行き先　金属と肉が削りあう音
流される血　虚ろな悲鳴
時折ＳＮＳを支配する　名も無き指先の怨嗟
無関心さは無垢を装い　改札口は、よもつひらさかを描きだす
匿名性に犯された灰色の庭
その病を振り払うかのように
一人の男が９％のアルコールをあける

雑踏と喧騒の死海に浮かぶ　色鮮やかな救命ボート
穴の空いた船底　溺れるだけの世界
それでも、彼が救いを求めたのは
紙切れの神ではなく　５００mℓの液体
そう、皺くちゃなスーツ　罅割れた革靴

路上の失態すら許されない！
スマートフォンの監視カメラに突き動かされる此処
彼は解放と救済に導かれたのか？
不燃ゴミと罵られた彼が浮かべる微笑
いつかの家族写真すら砕け散って……
……やがて崩れ落ちる匿名のハイヒール
彼女のブランドが可燃ゴミへと帰す残影

私の濁った瞳に映る、夢見る機械の行進
池袋駅、午後二時　無数の足音が向かう先は死の国
死んだ眼をして死にゆく死の二乗三乗四乗五乗
六畳間にきっと誰もが独り　酩酊と昏迷のままに――
――あの日、からっぽな柱巻き広告にもたれる彼だけが
途方もない幸福に満たされていた

### 受賞の言葉

北村灰色

日々、自らが積み重ねてきた表現を、刹那の冬の花火の如く爆裂させた、今回の作品が賞を頂けて光栄です。

いつか忘れてしまうかもしれない、消えてしまうかもしれない、抱いてしまった途方もない空想や狂った現実の体験も、「詩」という形で永遠に何処かに残るから、それが何より嬉しいです。

北村灰色――きたむら　はいいろ
1989　群馬県生まれ
埼玉県と東京徒の境界線に在住
大東文化大学文学部日本文学科卒業
北村灰色名義で小説や詩、短歌を作成しています。加えて、ポエトリーリーディングや歌、私自身によるギター、ベースギター、ドラムなどの様々な楽器を用いた即興演奏も行っています。

第18回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

# 合歓木

## 笹井のぶこ

川原風が朝靄を押しのけ
葦の葉先にとまる露に白光がかすかに映り
毛繕いをおえた水鳥が飛びたつころ

閉じられた合歓木の葉
腺毛につたわる明けの震音が
細い羽状の葉身に目覚めをつたえる
（夜に交わしたつかの間の温もりを　解いて

路面電車をおりた橋のたもと
車窓から目にした合歓木
視界がすべて青に塗られ
空にはりついて　風に揺れる
砦を守るように葉が繁り
絹糸のような生まれたての真っ白い蘂（しん）が
風をやわらかくふくむたび
花糸が　淡くあかく　扇をひろげる
（血色をましながら無数の幼子の掌が　揺れ

歩道すれすれに通る路面電車が
激しく連写され
曇りガラス越しによぎるような朧影が
熱を帯びながら近づいてくる
川風が暑気を放散させると

ああ　これは幼子たちの祈りの手のかたち　と
見上げる人がいう
その人は歩きだす
いくども行き来する橋から橋
路面電車のひと駅ぶんだけ
ここから先にもここから後にも渡れない
昼下がりの熟れた気配のなか
記憶の場所を記憶のままに往来する
（石段に焼きついた影だけが存在を　残し

警笛が鳴り　細長い停車場を掠める風威
隙間の時間に押しこまれる
飴色の古い路面電車
車掌も乗客も俯いて身じろぎせず
磨かれた床板に目を落としている
黒い車掌鞄の口金は固く閉ざされ

笹井のぶこ
ささい　のぶこ
1957　北海道生まれ
藤女子短期大学保育科卒業
帯広市立保育所に34年間勤務
北海道詩人協会所属
詩集「アクアマリンの薄衣」
第2詩集「夏の謀り」で
第53回北海道詩人協会賞受賞
第29回伊東静雄賞　佳作など

# 笹井のぶこ

揺れない吊り輪に沈黙の錘が垂れさがる
車窓の外は煤塵に覆われ
瞬時に止まった時間が延々と支配する

黒くひしゃげた水筒の蓋がカラカラころがった
ころがった先は橋のたもと
合歓木の花蘂が　ほとり　ほとり　落ちてながれ

ああ　きょうも川があかくなりました　と
洗う人がいう

川べりに身をかがめ　白いものを洗っている
洗うほどに　解け
何本もの白い帯になりながら川底にのまれた
冥鬼がわななくようにうねっている
（緋色の気炎を吹く川では水を　満たせず

闇にまぎれて　夜濯ぎ
昼間の余熱を　一瞬にして消滅した痕跡を
（そうして鋭利な折り目の羽を合わせた
折り鶴のように　眠る

## 受賞の言葉

笹井のぶこ

言葉に込めるエネルギーの薄れ、情動を表出できず足踏みをするもどかしさを感じるようになり、欲求を阻止する自分自身の殻を破るため、同人誌から離れることにした矢先、この様な貴重な発表の場を与えていただき、新たに向き合うため背中を押していただいた思いです。

混沌とした渦や重い扉を前にしても怯まず書き続けて行きたいと思います。文芸思潮誌と選考委員の皆様に感謝申し上げます。





Nobuko Sasai

# 合歓木

闇にまぎれて　夜濯ぎ
炎暑にさらされた不確かな記憶を　折りたたまれた存在を
（そうしてあかい水滴が　澄んだ飛沫となるまで　洗う

風のそよぎは　ささやき声
繃帯をください　澄んだ水をください
あすの朝　目覚めるともかぎらない

合歓木の花蘂が　ほとり　ほとり　落ちてながれ
ほとり　ほとり　落ちて　ながれ

蔓を捩じらせ垂れさがる葉に
さざ波たつ入り江から中州を越え
潮風が吹きつけても
まだ青空にはりついた　合歓木の根元ふかく
血を吸いとられたように
鉄路を跨ぎ　斜影が　長く　長くひく

# しらふのくるい

## 藤城 藍

目の前にあるのにどうしても掴めない鈍色に輝く立方体
手を伸ばすたび、焦点がずれ視界がぶれる
背後では運命が佇んでいる
素知らぬ顔で

器を持たぬ私の側を、ありとあらゆるものが通り過ぎていく
焼き切られるほどの喜びや
引きちぎられるほどの悲しみも
瞬く間に飛び去ってしまう
お願いだから置いて行かないでここにいて
それ無くしては成り立つことができないのです
人間でいたいのです！

乞い願っても叶わぬ望みはやがて飢えをもたらす

自給自足の綻びは突然に
陽だまりの下で花を愛でていると、太陽が隠れ花は萎れた
ほらみろ、肋骨が開いてきたぞ
薄暗い空に向かって、貪欲な悪食が焔をひとつ

藤城　藍
ふじしろ　あい
1988　兵庫県生まれ





合言葉が滑り出る
「全てであり全てでない」
ようこそ、我が愛しのイントラ・フェストゥム！

器を持たぬ私の中へ、ありとあらゆるものを呑み込む
像だ
実在だ
区別もせずにばりばりと噛み砕く
混沌と秩序とが同時に訪れて、
吐き気がして頭がどうにかなりそうなのに
ああどうしてこんなに気持ちがいいのか！

美は無残にも失われ、残ったのは満ち満ちた泥ばかり

ブルーブラックの涙が流れるならばどんなに良いか
泣けばそれが言葉になるのだから、見るもの全てに涙を落とせば話が早い
うなじにナイフで切れ込みを入れてブルーブラックの血が流れるとして、
吸い取り紙をそっとあてたとしたら
一体なにが起こるのだろう？

### 受賞の言葉

藤城　藍

募集要項を読んで「天を射抜いてみたい！」と感じたのがきっかけで応募しました。優秀賞をいただいたことで少しでもそれが出来たのかなと思うと、とっても嬉しいです。選んでいただいてありがとうございます。

自分で書いたとはいっても、周りにいる素晴らしい友人たちと過ごす時間や交わす会話があったからこそ、この詩を作ることができました。感謝の気持ちを忘れずに、これからも自分との闘いを続けていこうと思っています。

# 針のような崖の上に立つ翼のない鳶

## 薬師丸怜央

針のような崖の上に立つ翼のない鳶
君はいつも縛られて
明日の見えない昨日を潰してきた
風に乗る清々しき心地は
永遠に奪取された
もぎ取られた記憶はない
対価を払った記憶もない
小さき臓腑に残されたのは
風はもう味方ではなく
憎悪の対象でしかないという事実
遠雷が背筋をすっと撫で上げる
黒雲が心臓の回路を断ち切る
舌舐めずりする大蛇のような
貪欲に捻転する　どす黒い波
一歩踏み外せば奈落の底

老女　水晶玉の向こうで顔伏せる
理性のベールが突風に持っていかれないよう
指先に力を込めている
ベールを脱いだ姿は
とても人様にはお見せできない
誰かを不快な気持ちにさせ
貶めてしまうことになる
針のような崖の上に立つ翼のない鳶
君も僕も
あの鳶の仲間



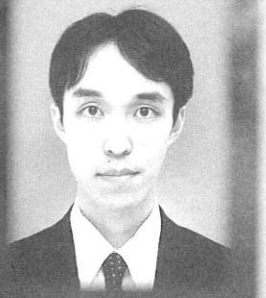


まるで　私達　みたい　だ
遠くに行ける
けど
距離は頼りなきもの
影のようにつきまとう
思えばいつでも断ち切れるのになぜ
人生は転覆したまま推移していく
ほんのわずか
口を滑らした
灯油塗れの部屋でマッチを擦る
地盤は安心できる代物でなく
じわじわずり落ちていく
今夜巨大な地殻変動が起きる
と
老女が予言する
人類は滅亡の一途を辿る
どうすれば救われるのですか？

### 受賞の言葉

薬師丸怜央

この度は優秀賞をいただき誠にありがとうございます。これらの詩を紡いでいた当時、感染症や戦争勃発など、暗いニュースが連日のように続いていたことを思い出します。それはただ見えないだけで、あらゆる危機は誰においてもすぐ隣り合わせにある。自身のレーゾンデートルの不確かさを文字とアートの狭間のような言語で表現しました。私の内にある感性自体も不確かなもの。まめに錆を落としながら磨き上げていきたいと思います。



**薬師丸 怜央**
やくしまる　れお
1992　茨城県生まれ
千葉大学薬学部卒業
会社員
2020 第16回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞受賞
2021 第17回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞受賞

# 泪の塊

## 遠藤芳子

いつか全ての思い出が消え
人は思い思いの空を見る

硝子細工の命は
繊細な影を落とし
透き通った心を
揺らすことなく
そこにある

微笑みを絶やさず
無音
たじろがぬ若々しさ
解ける真紅の血が
たっぷり流れている厚い胸板
見ぬふりを通した心の細波は
遺影の身の内に





繕う間もなく
裂け目をつくる
心の襞の奥に
残る永久凍土の欠片
手繰り寄せる思い出さえ
切断する硬さ
一突き
の気配をみせ
脆弱な母性は
狼狽える

強力さえ分け入らぬ
奥深い山懐に眠る哀しみ
薄墨色に暮れた故郷からの風
硝子細工の眼に盛り上がる泪

いつか全ての記憶が飛び去り
人は思い思いに歩みだす

### 受賞の言葉

遠藤芳子

この度は、拙作を優秀賞に選んでいただきありがとうございました。

「詩」にはほど遠いと思いながら、書かずにいられなくて言葉が湧いてくる度に書いてきた作品です。病と闘う日々ですが、今後も精進を重ねて少しでも「詩」に近づきたい、そのことは自分が救われたいと思う心と重なっています。

選考にかかわってくださった諸先生方に、深くお礼を申し上げます。

遠藤芳子
えんどう　よしこ
1940年生まれ
東京都狛江市在住
「地平線」、「詩都」同人、
「文芸思潮」現代詩賞奨励賞7回

第18回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

# ゆらり

松永悠希

ベンガル湾の底で
ひときわかがやく小石を拾い
わたしたちは囁き合った
世界中でいちばん美しい宝石をもって
わたしの吹き出した気泡の螺旋構造が
繊細なひかりの糸となり
空から射しこむ
目をあけることは

ゆるやかな別れだった
海辺の家から見える坂を
自転車でかけ上がる少女は
観測者を排斥した主観世界を生きる
真夏の昼下がりの物語
額に滲む汗をぬぐい
そのまま海へ
溶け込んでゆく

## 受賞の言葉

松永悠希

公的に開かれた伝達のための言語から、自分自身の淵源としての言語へ。

日常性のなかで習慣と曖昧さによって陳腐化した言葉に、ときどき息が詰まりそうになります。今回の詩作は、私にとって初めての試みでした。当たり障りのない月並みな言葉ではない、私の中を泳ぐ言葉を掬うその作業はとても心地のよいものでした。これからも詩作を通し、まだ私になる前の言葉たちを育ててゆこうと思います。

この度はありがとうございました。

松永悠希
まつなが　はるき
2003年　愛知県生まれ
中学の教科書に掲載されていた尾崎放哉の自由律俳句から、詩の世界に興味を持つ
現在　愛知県内の大学に在学中
文学部哲学専攻二回生

第18回「文芸思潮」現代詩賞 優秀賞

# 雑闘（ざっとう）

## 中村郁恵

力感のない指で
ちかくとおくひとがつながる
指紋の付かない money もまわる
電磁の波がうねる街
つぎつぎ剝かれていく時代に
ふさわしく行き交う靴音を
周回遅れの歩みで聴く
踏まれていくアスファルトは
装いの蓋
整然と流れる暗渠の下に
とおい時間が閉じこめられている
浅い春の夕まぐれ
痛みより遅れて泡立ってくる感情を
とがる風が突いてくる
垂直で構えるビルとビル
直角に切りとられた空が
陽をたたみながら
おおきな視線で透いてきて
曲線だらけのからだは
いっそう歪んだ影を
矩形の壁面に溶かしこむ

シグナルが青になる
つま先というつま先の
迷わないベクトルに圧され
ひとり立ちどまる
この先が　やがて
〈終わりのとき〉につながるのだ――
縮小された残りの生を
あかるい孤独の温度で知る
歩き疲れた足裏が痛い
ちいさなリアルが
〈いま、ここに在ること〉の
意味を抜きとり
たしかな感覚だけをおろしていく
赤から変わる
右足を前へ
あたらしい情報が
迅速に curation されては
跡ものこさず塗りかわる街の
粗い流れに
ささやかな接点で
まぎれこんでいく

※ curation ＝ 収集した情報を分類し、つなぎ合わせて新しい価値を持たせて共有することをいう。キュレーションを行う人はキュレーターと呼ばれている。
『コトバンク』より抜粋

### 受賞の言葉

中村郁恵

拙い歩みながら綴ることをやめられずにいる。言葉に対する熱もあるが、バランスを崩した心情や日常を軌道修正できる場所だと本能が感知しているからだ。軌道を戻す途中で、無意識に放置していた小さな疑問や心の動きに再会することがある。この些細な気づきは、沈黙に耐えられず詩の言葉へ熟されていく。かたちになる悦びが、また私を綴らせる。

この度の評価に心から感謝し、今後へ繋がる弾みにいたします。

中村郁恵
なかむら　ふみえ
1965年生まれ
札幌市在住　主婦
「グッフォーの会」（札幌）で詩作
「800字の会」（函館）で散文を精進途上
『文芸思潮』現代詩賞第12、16回優秀賞
『文芸思潮』エッセイ賞第14、17回優秀賞

# 死の想い

## 佐藤　裕

霊安室の白い壁に
黒いセーターが吊り下がっている
死体はまだ現れず
四角く閉ざされた空間に
朱色の斑が漂う
椅子に腰掛け　じっとうずくまる
二つの人影
時折空咳をしながら
ぼそぼそと独り言を繰り返す

廊下を乾いた靴音が響く
白衣を着た骸骨が　風のような声をあげ
二人は寒さに震える
死刑台に向かう罪人のように
寝台には　まだ温もりがある
涙で変色したシーツの端
抜け落ちた数本の髪の毛
命の重さが　画鋲のように
痛みを伝える

佐藤　裕
さとう　ゆう
1956　神奈川県横須賀市生まれ
早稲田大学卒業後、横須賀市役所入庁
定年退職後、現在は児童養護施設勤務
「ハマ文藝」「頌」「象通信」同人
第14回～16回「文芸思潮」現代詩賞佳作
第17回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞





胎児を孕んで痩せ細って行く長身の女
光の束で形づくられた檸檬
体内から　すでに腐臭が始まり
黒人の叫び声が
嵌め込まれた向日葵に
突き刺さる

死体は　まだ現れない
宵の海に浮き沈む　難破船
折れた帆柱によじ登る
老爺の後姿　衣服は剥ぎ取られ
突き出ている尖った臀部
雪に覆われた山と山の間から
針のような海の光が　不様に垂れ下がっている

死体は　まだ現れない
雨の電話ボックス
しゃがみ込む　長い髪の老婆
眼球が一つ　宙に浮かんでいる
黒い瞳が　銀河を見つめ
気球のように
視神経に繋がれた　頭蓋骨のゴンドラ
モノクロームの世界が近づき
眼窩に宿る　赤い血が
ゆっくりと　落下して行く

### 受賞の言葉

佐藤　裕

この度は優秀賞に選んでいただき、ありがとうございます。高校時代に同質性の世界が崩壊し、混乱する中で言葉により何とか心の秩序を保ってきました。大学時代に「荒地」の詩人に出会い詩を創作するようになりました。「誰もいないと／言葉だけが美しい」という牧野虚太郎の詩句が、心の底にいつも静かに流れています。謎めいた生の断片を、詩という形式で掴み取る努力をこれからも続けて行きます。